

【一般口演4】 第17席

山本玄通と岩田利斉

京都 高島 文一

十七世紀の鍼灸学を代表する学者としてこの一人を挙げねばならないであろう。山本玄通は1676年(延宝元年)『鍼灸枢要』全二十巻を著した。その内容は、滑伯仁の書を本として、百家の書に及び、素難、孫眞人、皇甫謐、王維一、赤烏神鍼、玄悟神鍼、37の六儀などの他、徐春甫の古今医統百巻、李挺の医学入門、徐氏鍼灸則、万病回春、頤生微論、赤水玄珠、類経などから引用されている。特に経絡及び内景圖を重視している。

岩田利斉は、1686年(貞享三年)『鍼灸要法指南』を著したが、全六巻から成り、片カナまじり文で、第一巻は、治療家の心得、鍼の法則などの総論、第二巻が灸治の法則、第三巻が内景圖など解剖書、第四巻が経絡圖、第五巻が中風、傷寒等の百の病証と選穴、第六巻が婦人二十三、小児二十八の病証と選穴が述べられ、引用文献は、素問(八正神明論、四時刺逆從論、陰陽応象論、離合眞邪論、宝命全形論、調経論)、靈枢(根結篇、逆順肥瘦篇、官鍼篇)、類経、難経、外科正宗、古今医統、遡洄集、察病指南、万病回春、鍼灸聚英、神應経、本草綱目、指微賦、金鍼賦、正伝或問、明堂灸経、資生経、医書大全、千金方、外台秘要方、鏡灸大全などがある。

両者に共通することは、解剛圖を重視した所にあり、山本玄通の側人内景圖には脾と胃の間に脂膜という臓器が描かれており、岩田利斉の第二十一内景側人蔵之圖の脾と胃の間には脂膜という臓器が描かれている。これは中国の鍼灸聚英や鍼灸大成には、この臓器は描かれていない。これは恐らく、1666年の郭章宜の『本草匯』から引用されたものと考えられるが、我が国の鍼灸学者の解剖に関する関心の高さを示すものと思われる。